

PLUS i Alius VOL.4



- プラスアイには読者に新しい価値や考えを提供する、という意味がこめられています。
- Alius は「別の」という意味のラテン語です。



学生部会

- 神大夏祭り ～みんなで楽しむ日本の屋台～
- 私の趣味

学科活動

- 第 24 回 中国語学科スピーチコンテスト
- スペイン語スピーチコンテスト

ゼミ活動等

- 松浦ゼミ 長崎に残る中国ほか外来の伝統文化調査
- 中林ゼミ 横浜中華街関帝廟参拝体験記
- 夏ゼミ 食を通して異文化を読み解く
- FYS (日本文化学科)
横浜美術館・リニューアルオープン記念展
「おかえり、ヨコハマ」展を見て
- 島川ゼミ 軍艦島に見る産業遺産と観光の未来
—長崎研修レポート—
- ウェルカーゼミ 学外実習
(秋葉原・米沢嘉博記念図書館)



講演会

- 「自分らしく生きていく」@多文化共生論

神大夏祭り

くみんなで楽しむ日本の屋台く



集合写真



開催の経緯

国際日本学部 国際文化交流学科4年
坂野文音

今回の縁日イベントは、日本的なものを作りながら留学生と交流を図るイベントを行いたいという思いから開催したものでした。学生部会では、横浜キャンパスで活動していた頃に料理イベントを多く行っており、メンバーからも料理イベントを開催してみたいという声が多数挙がっていました。そして今回、みなとみらいキャンパス21階のアクティブキッチンを貸していただけることになり、料理イベントの開催が実現しました。

イベントの企画段階において、作ってみたい料理が複数挙がったため、いくつかの料理をつくる縁日イベントを行おうという話になりました。また、参加者が暇になる時間が無いように、日本の縁日で楽しめるような遊びも用意することにしました。その結果、焼きそば、お好み焼き、チョコバナナを作り、ヨーヨー釣り、カタヌキ、射的を楽しんでもらう



参加者の皆さま

を書くことも計画しました。

当日は、留学生との交流イベントを開催しているISCAの方々にも協力してもらいながら、買い出しやスケジュールの作成などのイベント準備を進めていきました。



感想

今回、学生部会では初となる、みなとみらいキャンパスでの料理イベントであり、イベ

イベント内容となりました。それに加えて、開催日が七夕当日だったことと、国際課の方からお声がけをいただいたこともあり、イベント後にみなとみらいキャンパス1階に飾られている短冊へ願ひ事



チョコバナナ



射的

人文学会 学生部会

ント内容も盛りだくさんであったため、進行がスムーズに行かない部分もありました。ですが、メンバー同士で連携し、参加者の皆さんも積極的に協力して下さったため、無事にイベントを終えることが出来たと思います。「美味しい」という声を聞けたこと、留学生と日本の学生がコミュニケーションを取りながら料理や遊びを楽しむ様子と笑顔を見ることが、学生部会メンバーとしては何より嬉しいことでした。私自身も、近年はお祭りに行く機会があまりなかったため、改めて日本の屋台の楽しさを感じました。開催に当たっては、人文学会事務の方々を始め、人文学会や国際課の先生方、ISCAの方々に協力していただき、実現できたことであつたと思います。今回のイベントが、参加者の楽しい思い出や、日本文化に興味を持つきっかけになってくれたら嬉しいです。

外国語学部 中国語学科4年

内田 佳澄

当日の様子

キッチンでの事前準備の時間があまりなかったため、常にあわたらしい様子でした。洗い物をする人、食材の下準備をする人、調理をする人と自然に分かれて、連携をとりながら進められていたと思います。作るのに意外と時間が



料理ができる様子



調理中の様子

大人数の料理イベントという事で、普段一人分の量しか作らない自分にとって、未知の領域でもありました。作る難易度はそんなに高くないものばかりだったので、料理自体が失敗することはほとんどありませんでした。

特に印象に残ったことは、射的のゲームバランスにこだわったところです。射的をやったことがない自分が作ったものでもきちんとゲームとして成立しているのが心配でした。しかし、何度も試し打ちをして、的がきちんと倒れるように調整できた時はとても楽しかったです。

感想

冊を飾り、イベントは終了しました。



短冊を飾る様子

かかりましたが、最終的に料理が完成し、みんなで夏祭り気分を味わいながら食べることができました。その後は片づけをしつつ、用意した射的やヨーヨー、カタヌキなどで遊びました。最後に、1階に飾ってある笹に各自の願いを記した短冊



ヨーヨー釣り



学生部会・ISCAの方

感想

私の感想としては、主に厨房に入っていて参加者とあまり関われなかったのが残念だったというのが正直なところである。また、運営の難しさを知ることができた会だったなと感じている。次回の企画ではより良いものになるようにしたい。

国際日本学部 歴史民俗学科1年
萩原 陸

私の趣味

My Hobbies

人文学会 学生部会

音楽

外国語学部 中国語学科4年 内田 佳澄

私の趣味は、音楽を聴くことと楽器を弾くことです。まず、音楽を聴くことから紹介します。ここです。「音楽を聴く」とは、何も考えずにただ楽曲を流すことだけではなく、楽曲の音を聞き取って再現すること（いわゆる「耳コピ」）も含んでいます。この耳コピという作業はとても難しく、何度聞いてもわからないことが多々あります。しかしこの作業の醍醐味は、「自分で再現すること」にあります。楽器やPC上で曲を再現できた時の楽しさが忘れられず、一度手を付けると没頭して時間を忘れてしまうほどです。



次に、楽器を弾くことについてです。好きな曲を弾くのはもちろん、耳コピで探した音を鳴らすのもとても面白いです。難しくて弾けないフレーズに当たった時は、工夫しながら何度も練習します。弾きたい曲が色々あるため、どんなフレーズが出てきても初見で弾けるようになることを目標に、日々の練習に励んでいます。

ビーズアクセサリー作り

国際日本学部 国際文化交流学科4年 坂野 文音

私の趣味はビーズアクセサリー作りです。幼い頃から、自分がときめくデザインのことをコツと形にしていく作業が好きだった私は、今まで、編み物やミサンガ、アイロンビーズに熱中してきました。そして、現在はビーズアクセサリー作りにハマっていて、画像検索アプリや動画視聴アプリで作り方を見ながら、リングやネックレス、ブレスレットなどを作っています。作り方を探す際は、複数の言語で検索をかけることで多様なデザインに出会うことができます。

私にとって制作することだけに集中する時間は、気分転換に繋がるとも大切な時間です。また、完成すると達成感を味わうことができ、出かける時に自分で

作ったアクセサリーをつけていくと気分が上がります。制作過程から完成後まで楽しめる点がものづくりを趣味にする魅力ではないかと思えます。今後より複雑なデザインに挑戦したり、様々なものづくりに取り組んだり、趣味の時間を充実させていきたいです。



制作したビーズリング

Netflixで韓国ドラマを観ること

国際日本学部 国際文化交流学科2年 大沼花



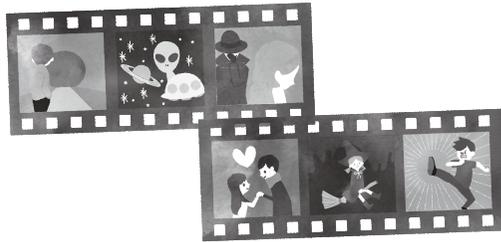
私の趣味はNetflixで韓国ドラマを観ることです。ラブロマンスやサスペンス、ヒューマンドラマなど様々なジャンルがあり、飽きることなく楽しめます。韓国ドラマは俳優の演技力が優れていて、物語の世界に没頭することができます。特に『愛の不時着』や『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』などの作品は、ストーリーが感動的でオススメです。また、私は第二言語で韓国語を選択しており、ドラマを通じて自然な会話表現や発音に触れることができるため、学習の一環としても役立つと思います。最初は字幕を頼りにしていましたが、徐々に聞き取れる単語やフレーズが増え、理解できる場面も多くなってきました。韓国家族観や食文化、礼儀作法などをドラマから学ぶことができ、教科書だけでは得られないリアルな知識が身につけると感じます。学習と趣

味を両立できるこの時間は、私にとって非常に有意義で、韓国語ドラマを字幕なしで見られるよう、日々の勉強にも励んでいきたいです。

映画と共に

外国語学部 中国語学科2年 山本奈津希

私の趣味は映画鑑賞です。きっかけは小学四年生の時に、家族でUSJに行ったことです。母がUSJで楽しめるように、「ハリポッター」や「ジュラシックパーク」などの名作を見せてくれ、映画への興味が一気に広がりました。高校時代には「スターウォーズ」を題材に人種問題を探究しました。制作背景を調べるうち、映画が単なる娯楽ではなく、社会と深く結びついたものであることに気付きました。今では気になる作品があれば迷わず映画館へ足を運びます。1本の映画に込められる1年半〜3年の制作期間に思いを馳せながら、幼い頃と同じ胸の高鳴りを感じて鑑賞しています。両親がくれたこの趣味を一生大切にしていきたいです。



考えること

国際日本学部 歴史民俗学科1年 萩原陸



私には趣味と言えるようなものはあまりない。ただし、趣味を生活の中で大切にしているものと解釈するのなら「考えること」を挙げたい。一口に考えることと言ってもこの世には様々な考え方という行為がある。私の場合、日常からちよつと離れて哲学的な思索を深めることを趣味としている。最近の興味は個人のアイデンティティと価値観についてがメインであるが、ここでは書ききれないので割愛する。

ところで、私が考えることを続けるのには理由がある。それは自分の成長につながると考えているからだ。前述のテーマからわかる通り、哲学的といっても自分に即したテーマを考えることが多い。大学生は子供と大人の境界にいる存在である。そんな時期だからこそ考えることを続けるべきだと思うし、続けていきたい。

第24回 中国語学科スピーチコンテスト

外国語学部 中国語学科 実行委員会

中国語学科では、毎年「外国語学部文化ウィーク」の一環としてスピーチコンテストを開催し、学生たちが日頃の学習成果を発表する機会を提供しています。この取り組みは、中国語学習への理解と関心を深めると同時に、学生の学修意欲をさらに高める貴重な機会となっています。

その伝統を継承し、2025年1月15日午後、みなとみらいキャンパス米田吉盛記念ホールにおいて、中国語学科主催、人文学会後援による「第24回スピーチコンテスト」が開催されました。

本コンテストは、暗唱部門、初習クラススピーチ部門、既習クラススピーチ部門の三部門に分かれて実施され、合計14名の学生が出場しました。暗唱部門では、指定された三つの課題文の中から一つを選んで暗唱し、発音・抑揚・表現力などが審査されました。スピーチ部門では、「中国」や「中国語圏」に関連する自由なテーマでの発表が行われ、飲食、文化、留学体験、言語学習、日常生活に関する話題など、多様な視点からの発表が聴衆の関心を引きつけました。

当日は、開会のあいさつに始まり、審査員の紹介、審査方法の説明が行われた後、各部門の発表へと移りました。参加者一人ひとりが練習の成果を存分に発揮し、会場には熱気と緊張感が漂いました。発表の後には、審査員からの講評と講評をふまえた審査結果の発表が行われ、各部門で優れた発表を行った学生に対して表彰が行われました。最後は閉会のあいさつをもって、コンテストは盛況のうちに幕を閉じました。

以下では、当日の様子をより詳しくお伝えするため、発表の内容や、司会者・参加者の感想などをご紹介いたします。



スピーチコンテストを終えて

高梨 愛華

法学部自治行政学科
暗唱部門二等賞



このスピーチコンテストには、新しいことに挑戦したくて参加しました。私は中国語を習ったこととはなく、きちんと人前で話すことができるか不安でした。しかし、練習会に参加することにより周りのレベルの高さに驚き、より一層気を引き締めて参加しなければと思いました。そして、他の参加者の方々や先生に実際に会ってアドバイスを貰えたことはかなり良い刺激と経験になりました。

本番は緊張しましたが、今までの練習の成果を出すことができ良かったです。次はもっと上手くなれるようにこれからも中国語の勉強を頑張りたいと思います。

今回のスピーチコンテストへの参加は、目標にもなり、今後の勉強のやる気にも繋がったので本当に良かったです。ありがとうございました！

平良 大輝

外国語学部中国語学科
スピーチ部門
初習クラス一等賞



この度は初習者スピーチ部門において一等賞を取れたことを嬉しく思います。本大会に参加するにあたって、テーマ決めに苦戦しました。テーマは自身の身近な中国との関わりに焦点を当て、私の地元である蒲田の羽根つき餃子店を紹介しようと考えました。お店の餃子の特徴だけでなく歴史も調べることで、より深みのある内容になったと思います。スピーチに関しては何度も練習を繰り返し、自分の音声を録音して聞き返すなどしました。本番では練習期間だけでなく、今まで3年間中国語を学んできた成果を発揮できたと感じています。

私はあまり積極的にこのようなイベントに参加する性格ではなかったのですが、この経験を通して自分の語学力に自信が付き、今後も様々なことに挑戦し残りの学生生活を悔いがないよう過ごしたいです。

薛 艶欽

外国語学部中国語学科
スピーチコンテスト司会



今回は、中国語学科のスピーチコンテストで司会を担当させていただきました。このような貴重な機会をいただき、とても光栄でした。文学をテーマにした大会に関わるのは、今回が初めてでしたが、司会という立場で参加したことで、私自身もたくさん学ぶことができました。

初習クラスの学生たちは、教科書の文章を暗唱する形式でしたが、どの学生も真剣に取り組んでいて、すごく感心しました。私は中国人ですが、あれほど感情をこめて、はっきりと文章を暗唱するのは自分にも難しいと感じました。だからこそ、あの発表をやりきった皆さんは本当に素晴らしいと思います。

既習クラスの学生たちは、自分で書いた中国語の文章を暗唱していて、その内容にも表現にも驚かされました。私は日本に来て何年も経ちますが、自分で文章を書く力が少し弱くなってきたように感じているので、学生のスピーチを聞いて、「私もまた作文を書きたい」と思いました。

今回のスピーチコンテストに関わることができて、本当に良い経験になりました。もっと多くの人が、このコンテストに興味を持ってくれると嬉しいです。

スペイン語スピーチコンテスト

外国語学部 スペイン語学科 西田 依麻

2025年6月26日(木)、神奈川大学みなとみらいキャンパス米田吉盛記念ホールにて、外国語学部スペイン語学科主催(後援: 神奈川大学人文学会)スペイン語スピーチコンテストが開催されました。このコンテストは、スペイン語学科に在籍する学生が様々なテーマについてスペイン語で発表し、日々培っているスペイン語の力を発表するというものです。毎年、外国語学部文化ウィークの一環として開催されています。



本年度は、新しい試みとして朗読の部が設けられました。主に、本年4月に入学した一年生に向けたカテゴリです。秋に上演予定のスペイン語劇の作品「Bodas de sangre (血の婚礼)」(Federico García Lorca 作)にちなみ、原作者の詩が、朗読課題の詩として選ばれました。今回は全カテゴリにおいて合計18名が出場しました。カテゴリBやCでは、「大学で学ぶことってなんだろう」という、観客である学生にとり身近なテーマや、「日常生活におけるモラルとはなんだろう」と、誰もが一度は考えるであろうテーマのスピーチがありました。また、日本の伝統文化を代表する江戸切子についての紹介や、イベリア半島北西部で話されており、消滅危険度が高いとされているアストゥリアス・レオン語についての詳説など、審査員にとっては順位をつけ難い素晴らしいスピーチばかりでした。また、各スピーチの後に行われたスペイン語での質疑応答の時間では、出場者は、それぞれが持つ瞬発力や臨機応変さをもって奮闘し対応しました。コンテスト後に開かれた表彰式では、学年の垣根を超え、さまざまな学生同士が歓談の時間を楽しみました。緊張が解けた出場者の達成感あふれる輝かしい笑顔が会場に彩りを添えていました。

(神奈川大学外国語学部HPの記事を一部転載しています。)

入賞のタイトル

Categoría A1 詩の朗読

La Guitarra (Federico García Lorca)

Categoría A2 詩の暗唱

La luna asoma (Federico García Lorca)

Categoría B

El asturleonés

アストゥリアス・レオン語について

1位

La universidad: ¿un lugar para buscar trabajo o para estudiar?

大学とは、就職のため、勉強のため、

R. Madrid, Barsa y la independencia de Cataluña

レアル・マドリード対FCバルセロナ、カタールニヤ独立運動との関係

Categoría C

1位

¿Por qué aprender idiomas?

言語を学ぶ理由

特別賞

El arte del vidrio: Edo Kiriko

ガラス工芸、江戸切子

特別賞

La universidad: ¿un lugar para buscar trabajo o para estudiar?

大学とは、就職のため、勉強のため、



リヴェラノリカ

「La guitarra」の朗読

今回のスピーチコンテストで賞を獲れてとても嬉しいです。私がこのコンテストに参加した理由は、中学生、高校生の頃に英語のスピーチコンテストに出場していて、大勢の人に見られながらのスピーチに慣れていた、大学生になってもそれを發揮しなかったのと、スペイン語の単語の意味を深く見るだけではなく、その発音の仕方などを学びたことから、そして単に図書カードが欲しかったからです。今までやってきたスピーチは英語で話していたので、みんなの前でスペイン語で話すのが初めてで本番までの緊張感が凄かったです。バロン先生やアレハンドロ先生の優しくて分かりやすいご指導や自分の日々の練習のおかげで、本番では緊張感と安心感があつて、少しリラックスしてスピーチすることができた気がします。

私は正直言うと、言語関係なく、あまり詩などに興味がなく、初めてこの詩を見た時も、個々の言葉意味が分からないまま練習をしていました。しかし、本番に近づくにつれて各言葉の意味や発音するときなどに感情をこめればいいのかなどを究めたおかげで、詩の凄さに少し気づけたと思います。

私はスピーチコンテストに参加できてほんとによかったと思います。みんなの前で話す自信、スペイン語の発音の大切さ、そして、賞と図書カードを獲りた競争心を体験できる機会はこのコンテストにしかない

魅力だと思えます。そういう体験を味わいたければ、このコンテストに参加することをおすすめします。ありがとうございました。

内田 明希

「La guitarra」の朗読

私は初めてスピーチコンテストに参加し、そこで審査員賞に選ばれたことにすごく驚きました。コンテストに参加した理由は、言葉の発音が好きであることと人前で話すことに慣れていきたいと思ったからです。練習しているときご指導いただいた、語のつながりや強弱に気を付けながら楽しく取り組んでいたのですが、リハールで他の参加者の発音などを聞いて今のままでは入賞は難しいと思います。ネイティブの方の発音を録音し、何度も耳で聞いて間の取り方とかを練習しました。他の方の上手さを目の当たりにしたときに勝ちたいという熱が湧いてきました。

私は本番、トップバッターだったため緊張もとても

しましたが事前練習を重ねて自信がついたからこそ一度も止まることなく詠むことができました。詠むことは詩なのでできる限りゆっくり話すことに重点を置きました。練習と比べると少し早くなってしまいました。また、「cullarita」という語の「r」の発音が難しかったです。ただの「ラ」ではないし強く巻き舌をするわけでもない音だったのでコツをつかむのに苦労しました。巻き舌自体完璧にはまだできないけれどこれからたくさん練習してスムーズにできるようになりたいです。

このコンテストに出たことによって自分の発音に自信ができました。授業中にスペイン語の文を読む時も

単語一個ずつではなくて二語、三語をつなげて読めるようになりました。今回は短い詩の朗読という形でしたが次回は一つレベルアップした詩の暗唱の方で挑戦してみたいと思いました。

澁谷 日菜華

「La guitarra」の朗読

私が参加しようと思った理由は、入学当初からスペイン語学科で開催されるこのスピーチコンテストに興味があり、中学生の頃に英語のスピーチコンテストに出場した経験を活かしたいと思ったからです。詩を読むだけの発表でしたが、英語とは違う発音の仕方やイントネーションでスペイン語に慣れたばかりの私にできるのかと最初は不安でした。「r」の巻き舌がなかなかできず、緊張で早口になってしまう私にアレハンドロ先生は優しくご指導をしてくださいました。そのおかげで本番では最も良いスピーチができました。

このスピーチコンテストに出場して、より多くの時間スペイン語に触れることができ、大勢の人の前で堂々と発表したことの達成感を味わうことができました。貴重な経験をありがとうございました。

雪江 勇太

「La luna asoma」の暗唱

今回、僕はスピーチコンテストで詩の暗唱をしました。正直に言うとテーマは自分で選んだわけではなく課題文でした。だから最初から「この詩を通して何か

を伝えたい！」のような熱い思いがあったわけではありません。でも、練習しているうちにスペイン語ならではの表現の面白さに気づきました。例えば「una」という単語。これはスペイン語で「月」という意味です。日本は「月が綺麗ですね」が告白になります。スペインでは月は死や不吉な意味として使われます。今回の課題文に出てきました。

では僕はなぜ今回スピーチコンテストに出場したのか。それは大きくわけて2つの理由があります。

まず1つ目は、優勝したら図書カード1万円分がもらえるという点からです。最近小説や哲学書や履修してないけど気になる学問の教科書など、いろんなジャンルの本を読むことにハマっていて、ちょうど本代に困っていたところでした。

そして2つ目は「最大化の証明」です。これは僕が個人的に友達や家族に提唱し続けているもので、例えば並盛(150g)も特盛(300g)も同じ値段(900円)の油そばを食べる時、僕は特盛を頼みます。そうすれば最大化しているということです。そして僕は実質1800円の油そばを食べたということになります。このような最大化の理論を今回のスピーチコンテストで友達や家族に証明しようと思いました。今回の僕のスピーチコンテストの練習時間は2時間です。2時間で1万円を獲得できれば実質時給5000円です。僕は「絶対今回優勝して最大化するからね！」と友達や家族に言いきり、無事優勝して最大化の証明に成功しました。僕は優勝以外のことは考えていませんでした。

ここまで動機のことを話してきましたが、正直、動機はどうでもいいと思います。本当に意味のあることはちゃんと何かに本気で向き合うということだと思

ます。

人生は一度きりなのにもかかわらず多くの人はその実感がないように感じる時があり、そしてこう言っている自分にもその実感がない時があります。誰かのためにだけに生きているのは勿体ないと思います。

実際、自分でもやりたいことが何なのか分からなくなっていた時もありました。そのため、僕はそれに気づいてから自分で自分の人生に責任を持って、何でもかんでも挑戦するようになりました。(作詞作曲・サークル・読書・スピーチコンテスト・YouTube・noteなど)。新しいことに挑戦することは自分の人生を「ちゃんと生きる」ということにも繋がると思います。

何年の何月何日にあなたがこの文章を読んでいるかは知らないけれど、今この文章を読んでいる時間は一生帰ってきません。どれだけお金を払っても、どれだけ待っても、この今回の人生で「今」という時間は一生帰ってきません。死んでも返ってきません。

もしあなたがこの文章を読んで自分もちゃんと生きたいと思ったのであれば、僕はあなたの味方です。僕もやりたいことが分からなくなることはよくあります。一緒にこの辛い人生を精一杯生きましょう。人生の辛さを自認して精一杯生きようとしている人はカッコいいです。そのようなカッコいい素質のある人が、誰かのためだけに自分の人生を使い切らないでください。僕と一緒にこの今回の人生を最後まで生きましょう。おじいちゃんおばあちゃんになった時に「これが私の人生だ！」と胸を張って言えるように。

岸本 佳子

「A luna asoma」の暗唱

スピーチコンテストは終わりましたが、私にとってスペイン語との関わりは、むしろここからが本当のスタートだと感じています。今回の挑戦を振り返ると、自分の中で得たものが多く、大切な経験になりました。実は、出場を決めたのはコンテストの数日前でした。「やっぱり出たい」と思い、思い切って先生方に相談したところ、忙しい中にもかかわらず話を聞いてくださり、練習の時間まで取ってくださいました。急なお願いだっただにもかかわらず、温かく背中を押していただいたことに、心から感謝しています。

「チャンスがあるうちにやるべきだ」と思ったのは、そのとき自然に浮かんできた気持ちでした。今しかできないことに向き合ってみようという思いからでした。本番では緊張して早口になったり言葉が飛んだりもしましたが、他の参加者もみな緊張しながら一生懸命頑張っている姿を見て、とても励みになりました。「自分だけじゃない」と思えたことで、少し気持ちが楽になりました。先生方もあたたかく見守ってください、安心して臨むことができました。

ただ内容を伝えるのではなく、「どう伝えるか」を考えながら話すという意識が持てたことも、自分にとっては新たな学びだったと思います。結果にかかわらず、この経験は少し自信につながりました。もしも、こういった場面で迷っている方がいれば、自分の気持ちに正直になって、一歩踏み出してみてほしいのではないかと思います。こうした経験を通して、それぞれの力になるのではないかと思います。

村山 莉子

El asturleonés

「アストゥリアス・レオン語について」

今回スピーチコンテストに参加するにあたって、せっかくスペイン語学科の発表なのだから、自分が興味を持っていることと、言語に関するを組み合わせたテーマにしよう……と思ひ、スペインの多様性、中でもアストゥリアス・レオン語という言語を取り上げることになりました。

スペイン語（カステイリヤ語）以外にも、スペインのいくつかの自治州では、公用語として認められている言語が存在します。しかし、それ以外の言語はあまり知られていないのではないのでしょうか。今回取り上げたアストゥリアス・レオン語は、近年独立した言語として見直されつつある一方で、未だにスペインにおけるいかなる自治体においても公用語にはなっていません。

スピーチでは、こうした少数言語の置かれている状況や、「言語」と「方言」の間のあいまいさ、そして公用語化に関する議論などに触れました。全てを語りきることはできませんでしたが、こういった話題を通して「スペインってどんな国なんだろう」ということを考えるきっかけになったり、日本でも似たようなことがあるのではないかと、少しでも思い浮かべてもらえたのなら、嬉しく思います。

また、人前で話すのが本当に苦手で、練習をしている時も、もちろん本番も、常にとんでもない緊張でいっぱいでした。しかし、無事に終えることができただけでなく、賞までいただくことができ、とても嬉しいです。報われたところか、それ以上に大きなものを

いただけたように感じています。

私の拙いスピーチの練習に付き合ってくださいました先生方や友人たち、そして当日私の話を聞いてくれた皆さんに、心から感謝申し上げます。これからも少しずつ成長できるように、努力を重ねていきたいと思ひます。

大石 智里

La universidad: ¿un lugar para buscar trabajo o para estudiar?

「大学とは？就職のため？勉強のため？」

まさか自分がこのコンテストに出場し、入賞までいただけるとは思っていませんでした。自分のスペイン語力にはあまり自信が無く、もともと人前に立つことも苦手だったため、参加も初めはためらっていましたが、自信が無かったからこそ、自信が持てるまで練習を重ねました。Spanish Expects を活用し、先生方や先輩にアドバイスをいただきながら自分が目指すスピーチに近づけていきました。テーマは「大学へ通う意義」についてで、自分の意見を形にするのは難しかったですが、スペイン語を勉強したいと思った原動力で話せる内容に仕上げられたと感じています。原稿作りから本番までは頭の中がいつもスペイン語でいっぱい、その過程で多くの表現や語彙を自分のものにできたという実感があります。本番は緊張しながらも同じくらい楽しさもあり、やりきって晴れやかな気持ちで終えることができました。結果2位に加えて観客特別賞までいただけ、多くの人に伝えられたのだなと思うとうれしかったです。またこのコンテストを通して、どんな文章でも綺麗な発音で読めるようになり

たいという新しい目標ができました。参加のきっかけをくださった先生には感謝しかありません。挑戦して本当に良かったです。

清水 遙華

R. Madrid, Barsa y la independencia de Catalunya
「レアル・マドリッド対FCバルセロナ、カタルーニャ独立運動との関係」

私は、スペインへの留学経験を活かしたいと思ひ、今回スピーチコンテストに参加しました。テーマは、自分が留学中に関心を持った「スペインの政治とスポーツの深い関係」についてです。スペイン語は継続的に学んできていたため、言葉の面で戸惑うことはほとんどありませんでした。むしろ、自分の考えをどんな構成で、どんな言葉で伝えるかを考える作業が印象的で、準備期間中はとても楽しく取り組むことができました。スピーチという形で発表するのは初めてでしたが、自分の留学経験や興味を改めて見つめ直す良い機会となり、文章を練ったり、話し方を工夫したりするプロセスも非常に意味のあるものでした。ただ、本番当日はやはり緊張がピークに達し、大勢の人の前に立った瞬間、体が一気に固まったような感覚がありました。朝からずっとお腹も痛く、今までにないほど緊張していたと思ひます。緊張しながらも、自分の言葉でしっかりと伝えたいという思いが強く、最後までやりきることができました。終わった瞬間には、緊張から解放された安心感とともに、大きな達成感を感じました。今回の経験を通して、自分の伝える力や準備の大切さを改めて実感し、今後はさらに多角的な視点を持ちながら自分らしい表現力を磨いていきたいと思ひま

す。また、スペイン語を学ばしきや深さを実感し、これからもより積極的に語学力向上に努めていきたいと感じています。

山藤 英絵

¿Por qué aprender idiomas?

「言語を学ぶ理由」

今回私がスピーチコンテストへの出場を決めたのはひとえに、私が大学生生活を送るうえで日々感じていたスペイン語の語学学習への思いを何らかの形にしようと思ったことがきっかけでした。

原稿を書き進めるうちに伝えたいことが次々と湧いてきて、気付けば規定の時間に到底収まりきららない内容になってしまいました。そんな中、先生方にご無理をお願いして時間を調整していただき、本当にありがとうございました。

内容はなるべくスペイン語を学び始めてすぐの人にわかりやすくなるように心掛けましたが、うまく届いたか少し不安です。本番では多くの人の前で発表することへの緊張はありましたが、練習の成果を発揮できたかと思えます。質問の時間も、自分なりに相手の意図を汲みながら応じる中で、これまでの学びが少しではありますが自分の自信に繋がりました。終わったあとの達成感と、去年少し残った後悔を払拭できた、かけがえのない経験になりました。

今回のスピーチコンテストを通して、昨年からの自分の言語面での成長と、スペイン語学習へのより一層強い思いを実感しました。これからも自分のペースで、語学の楽しさを感じながら学びを深めていけたらと思います。

このような貴重な機会をいただけたこと、また原稿の添削や練習にご協力いただいた先生方に、改めて心より感謝申し上げます。

宮本 夏希

El arte del vidrio: Edo Kiriko

「ガラス工芸、江戸切子」

私はこのスピーチコンテストに参加するのが二回目でした。一回目の参加は経験も未熟で失敗してしまい、心残りがありました。二回目も失敗してしまうのではないかと参加を躊躇していましたが、留学した経験を何も残せないのは嫌だと思い、今回も参加しました。

Categorías はテーマが自由だったので、せっかくなら日本の文化について話したいと思いました。日本文化に興味のあるスペイン人の友達がたくさんいて日本文化について聞かれることが多いため、スペイン語で日本文化を説明したいという気持ちもありました。

スペイン語初心者にもできるだけ伝わるように、どの単語を使うか考えて内容を練るのが難しかったです。練習では先生やスペイン語学科の友人が手伝ってくれて、先生には発音やスピードについてアドバイスももらい、友人には暗記しているかどうかの確認を手伝ってもらいました。また、スペイン語は発音が大切なので発音に気をつけながら読むことを意識して練習しました。

このスピーチコンテストに参加して私はまた成長できたのではないかと思います。参加後の授業ではスピーチコンテストで覚えたスペイン語の構文を使うことができ、発音も前よりも気をつけて読むようになりました。これからもスペイン語で自分の考えや文化を

伝えられるよう、もっと語彙力と表現力を身につけて次に挑戦したいと思います。

サポートしてくれた先生や友人には、本当に感謝しています。応援があったからこそ、最後まで諦めずに頑張れました。



松浦ゼミナール

長崎に残る中国ほか

外来の伝統文化調査

神奈川大学 外国語学部 中国語学科 松浦智子

神奈川大学 外国語学部 中国語学科 4年

加藤 瑠来・小谷 慶太・菅原 悠央・田中 羽菜

堀越 翔・緑川 未紗・柳川 流歌

2025年2月10日〜12日にかけて、人文学会の補助を得て、外国語学部中国語学科松浦3年ゼミのみで長崎フィールドワークを行いました。この時期は、春節からつづく元宵節の時期にあたるため、多くの文化施設で中国由来の伝統的なお祭りを調査することができました。調査スケジュールとルートは以下の通りです。

- 2月10日…出島、唐人屋敷、ランタンフェスティバル@長崎新地中華街
- 2月11日…福濟寺、聖福寺、眼鏡橋、興福寺、崇福寺、ちゃんぽんミュージアム、孔子廟、グラバー園
- 2月12日…自由調査

以下、いくつかの調査地点について簡単な報告を参加学生に執筆してもらいました。

(ゼミ担当教員・松浦)

【1日目の報告】

◆唐人屋敷

唐人屋敷は、江戸時代、密貿易やキリスト教の浸透などを防ぐため中国人を集住させた居留地跡で、出島

と共に海外交流の窓口として重要な役割を果たしました。今回の合宿では、春節祭のランタンフェスティバル期間中に唐人屋敷跡で開催されていたロウソク祈願四堂巡りを体験し、道教の神々に祈願しました。また、蔵の資料館では唐人屋敷の歴史や江戸時代の貿易、文化交流、信仰について学び、当時の人々の暮らしをより深く知ることができました。

(柳川 流歌)



旧唐人屋敷内の土神廟。土地神をまつる廟では、元宵節にあわせてロウソク祈願の台がもうけられていた

◆長崎新地中華街
長崎新地中華街は、横浜・神戸と並ぶ日本三大中華街の一つで、約40店舗が軒を連ねるコンパクトながらも魅力あふれる観光スポットです。本格的な中華料理や長崎名物のちゃんぽん・皿うどんが楽しめるほか、異国情緒漂う空間や歴史的な建造物も広がっているため、非日常を味わうことができます。

今回はランタンフェスティバル開催期間中に訪れたこともあり、街全体がランタンの灯りに包まれ、より



ランタンフェスティバルのメインイベント会場・長崎新地中華街湊公園内にある関帝廟。中華式のお供えものがぎっしり



ランタンフェスタのメイン会場。あざやかなランタンを見に来た人でいっぱい

一層非日常的な空間だと感じられました。静かに灯るランタンで彩られた通りや川沿いの橋を散策する時間は、まさに時間を忘れるほど心が癒される体験でした。歴史やイベントを楽しむことができるこの場所は多くの人に訪れてほしいスポットです。

(菅原 悠央)

【2日目の報告】

◆眼鏡橋

長崎ゼミ合宿の2日目に私たちは眼鏡橋を訪れました。眼鏡橋は日本三大名橋に数えられる現存最古のアーチ型石橋の一つで、国の重要文化財にも指定されています。川面に映る影はしっかりと眼鏡に見え、またランタンフェスティバルの時期だったこともあり、周辺は華やかに飾られていました。中国の石橋技術をもとに作られたという歴史にも触れ、当時の異文化交流の痕跡を感じることができました。ハートストーンが恋愛成就のパワースポットとしても注目され、多くの人が触ったり、写真を撮ったりしていました。



長崎新地中華街側の眼鏡橋。川面に映る橋を遠くから見るとメガネのよう

(緑川 未紗)

◆興福寺

興福寺は、日本で最初に立てられた唐寺で日本黄檗宗発祥の地です。1632年、第二代住職である黙子如定が本堂の大雄宝殿を建立し、その後暴風で大破したため、1883年に再建されています。現在の大雄宝殿は、国の重要文化財に指定されています。

1654年には、日本黄檗宗の開祖である隠元が招かれ、第四代住職となりました。隠元は、インゲン豆や煎茶などを中国から日本にもたらし、日本の文化に



興福寺本堂。
本堂前部の柱は原爆の爆風の影響で
みな少し湾曲している

多くの影響を与えました。境内には大雄宝殿のほか、旧唐人屋敷門や興福寺鐘鼓楼、興福寺三江会所門などがあります。興福寺三江会所門に関しては、放し飼いの豚が門内に入らないように、敷居が高く設けられている点が印象的でした。
(田中羽彦)

◆ちゃんぽんミュージアム

長崎の名物「ちゃんぽん」の魅力と歴史を学ぶために、ちゃんぽん発祥の店である四海樓が運営するミュージアムを訪れました。ミュージアム内では、ちゃんぽんの歴史や文化に関するさまざまな興味深い資料が展示されており、展示物は写真も撮ることができました。また、四海樓とミュージアムが入った建物は、外観も立派で、長崎の食文化の奥深さを感じることが出来ます。残念ながら、私たちが行った時間帯は館内での食事提供が終わっていたため、実際にミュージアムに隣接する四海樓でちゃんぽんを食べることはできませんでしたが、近くのグラバー通りにある「長崎レストラン マリア館」で、みなで本場のちゃんぽんをいただきました。野菜たっぷりですूपも濃厚、とても美味しく大満足でした。
(加藤瑠来)

◆長崎孔子廟

長崎孔子廟は、1893年に清国政府と在日華僑が協力して建立したもので、中国の山東省曲阜にある総本山と同じくらい建物の随所に壮麗な伝統美を凝らした、日本で唯一の本格的な中国様式の霊廟なんです。



長崎孔子廟の正門。
正門脇には伝統的な形式で
石碑が配置されている

中国では赤は縁起が良い色とされているからか、外から見ても、中に入っても赤い建物や彩灯が所々にあったのですが、「色が眩しい！」といったことはなく、寧ろ正面から見ると配置が左右対照的であったり、建物は色落ちがあつたりと、孔子廟の長い歴史や日本とは違った異国の祭祀の様子を感じられる空間でした。入り口から少し進むと、72人分の孔子の弟子である賢人の石像が左右に並んでいました。よく見ると衣装や仕草、表情が全部違って細かく彫られており、一人一人の表情を観察するだけで1日が終わってしまいました。
(小谷慶太)

◆グラバー園

長崎のグラバー園は、スコットランド人貿易商トーマス・グラバーの邸宅を中心とした観光施設です。園内には当時の洋風建築がいくつも残されており、日本と西洋の文化が融合した異国のような雰囲気漂っていました。夕日に照らされた園内と、陽が落ちたからの園内ライトアップで、時間によって異なる風景を楽しめました。とくに上から見下ろす長崎港の眺めと夕日はとても綺麗で印象に残っています。ドイツニーランドでかかるような曲調の音楽も流れていて、わくわくするような場所づくりがされていると感じました。歴史が好きな人、異国感を国内で味わいたい人にはとてもおススメの場所でした。
(堀越翔)



グラバー園内の建物2階から見える夕日



夜のグラバー邸。
グラバー園の開園時間は長いので
いろいろな景色をみる事ができた

中林ゼミナール

横浜中華街関帝廟参拝体験記

国際日本学部 国際文化交流学科 中林広一
国際日本学部 国際文化交流学科 2年 田畑案吏・菱沼朱

国際日本学部国際文化交流学科は4つのコースから成り立っている。そして、各コースでは2年次に演習系の科目である「コース演習Ⅰ・Ⅱ」を配当している。学生は3年次のゼミナールにて自身の関心に沿って学んでいくが、本科目はその前段階において必要とされるトレーニングを行うことを目的としている。その内容はコースごとに異なっているが、筆者(中林)の所属する文化交流コースでは校外学習を実施している点に特徴があり、今年度は関帝廟・東京ジャーミー・印

刷博物館に学生を引率した。

これらの施設は異文化理解や多文化共生といった本コースのテーマを踏まえたものであり、かつ担当教員の専門に関連する施設が設定されている。筆者は例年横浜中華街にある関帝廟を訪れることにしているが、この関帝廟について施設見学に参加した学生がその概要をまとめてくれたので、以下紹介を行ってみたい。

(中林)

◆関帝廟について

横浜関帝廟は横浜港が開港して間もなくの1862年に1人の中国人が関羽の木造を抱き、小さな祠を建てたのが始まりとされる。

1886年に初代の関帝廟が建設されたが1923年の関東大震災により関帝廟は倒壊した。中華街も甚大な被害を受けた。生き延びた人々は関西に避難し、また広東や上海に帰国する者もいた。街の復興により1925年の秋には中華街復興のシンボルとして2代目の関帝廟が再建された。だが1945年の5月29日に第2次世界大戦中のアメリカ軍による横浜大空襲により関帝廟は消失した。1947年の初夏に古材を利用して3代目の関帝廟が完成した。しかし再び厄災に見舞われ、1986年の元旦に原因不明の火災により消失した。このとき、関帝廟に祀られていた関聖帝君、観音菩薩、地母娘娘の像は奇跡的に無事であった。4度目の再建では横浜関帝廟再建委員会が組織された。中国本土出身の建築士と大工職人が選ばれ、装飾品や建築資材は可能な限り中国から輸入された。関帝廟入口両側にあるのは北京より輸入された4・5トンの重さがある雲龍石で一枚岩から彫り出したものである。また東京、横浜、大阪、神戸に住む2000人以上の

華僑が力を合わせて6億円の資金を集めた。それまでの関帝廟は中華街の裏通りに建てられており、参拝者の多くが地元中華街であったが4代目の関帝廟は地元の人だけでなく横浜を訪れる人も気軽に足を運べるように現在の場所に移った。そして1990年の8月14日に現在も続いている4代目関帝廟は開廟式を迎えた。

150年の歴史を持つ横浜関帝廟は儒教・仏教とともに中国の3大宗教の1つであり民間で信仰されてきた道教の寺院である。道教の原型は不老長生の願いと無為自然を中心とした道家思想である。そのなかで時代とともに卜占や五行思想、医術、さらに儒教と仏教の倫理や儀礼も融合して現在の道教が成立した。

道教は民間から様々な神を取り入れている多神教であり最高神は玉清原始天尊を中心に上清靈宝天尊、太清道德天尊の三清である。しかしそれとは別に民間では最高神は玉皇上帝と見なされている。もとは三清を補佐する四御と呼ばれる四神の一柱であり唐の時代以前では道教のなかで玉皇上帝の地位は高くなかった。しかし宋の時代になると道教信者で有名な真宗が玉皇上帝を奉り、宇宙の支配者としての地位が確立した。玉皇上帝は人間の行為の善悪から翌年の運勢を決めるため人々は恐れ、敬った。また老天爺や玉皇爺とも呼ばれている。

唐の時代では日本に仏教だけでなく道教も受け入れられるよう圧をかけていたが道教は広まらなかった。しかし道教から輸入された神々や風水思想、節分の文化など道教が日本に与えた影響は大きい。

横浜関帝廟では五柱の神様が祀られている。本殿内部の天井は玉皇上帝が住んでいると言われる天空を拝むように仰ぎ見るドーム状の形になっている。主神で

ある関帝聖君は三国時代の武将、関羽が神格化されたものである。彼は張飛とともに、蜀を建国した劉備と義兄弟の契りを交わし、呂蒙の計により58歳で処刑されるまで忠義と貢献を尽くした。その誠実さから商人や実業家から厚く信仰され、現在まで商売繁盛と富を繁栄する神として崇められている。本殿中央に関帝聖君の像が置かれており、その左には関羽の従者であった周蒼將軍、右には養子であった関平將軍の像がある。他にも健康や多産の守り神で救いを求める者に慈愛と調和をもたらす観音菩薩。玉皇上帝と同じ四御の一柱で一般的には后土娘娘、または后土夫人と呼ばれる地母神で長命・多産・災害の保護を象徴する地母娘娘。土地公と呼ばれる村や地域の陰陽にわたる守り神として知られる自然神で土地の豊作を与えるばかりではなく商人や鉞夫、漁師から崇められ、財福を与える福德正神が祀られている。(田畑)

◆参拝方法

関帝廟での参拝方法は日本のお寺や神社ではないようなものである。まず、本殿に入りたければ、入る前に受付にて500円で売っているお供え物の線香を買う必要がある。しかし、本殿に入らずとも礼拝をできる形式も取っている。買った線香をそれぞれの神様の香炉に1本ずつ順番に焚いて、その煙を浴びる必要がある。

本殿での礼拝の仕方は、日本のお寺や神社ではすることはない、跪いて礼拝する方法を取っている。また、本殿内にも礼拝をする神様の順番があり、それに従わなければならない。跪いた後に三回礼をし、住所、氏名そして生年月日を心の中で唱える。その後、お願いをし、最後に一礼をする。

気を付けて
いただきたい
のは、お願い
の仕方であ
る。日本のお
寺や神社で
は、ほんやり
とした願い事
でも問題はな
いが、関帝廟
では、それで



香炉に線香を供える

は効果はない。その対象となる人やもの、そして場所、時間など細かく具体的に神様に伝える必要がある。そうすることでようやく神様が何をどうしたらいいのかなどが分かり、願い事を叶えてくれるという。

◆おみくじについて

ここでは神様に願うのではなく、神様に願いが叶うか聞くという方式を取っている。そして、その質問の神様からの答えがおみくじの運勢としてでる。そのため、神様に願いが叶うか聞いた後におみくじを引くという流れになる。

おみくじの引き方は、日本のお寺や神社とはまた違っており、簽桶（セイチュン）と呼ばれるおみくじの棒が入った筒を一本のおみくじが飛び出すまで振り続ける。そして、その飛び出てきたおみくじで本当に良いのか再度、神様に確認しなければならない。

その方法は、神筈（しんばえ）と呼ばれる三日月型の神具が二つでペアになっているものを床に落とし、そこで表と裏で出てきた場合はおみくじはそれで適切であるという意味になる。

裏と裏または、表と表が出た場合はおみくじの棒を引くところからやり直し、表と裏が出るまで繰り返す。もし、これが三回やっても成功しなければ、その日は運勢が悪いため違う日に改める必要があるという神様からのお達しを意味する。

無事、神筈での作業がうまくいった場合は本殿内の入口近くにあるカウンターまで行き、出てきたおみくじの番号を伝えると紙のおみくじを受け取ることがができる。

日本のお寺や神社のように、出てきたおみくじを結び場所が関帝廟にはないため、そのまま持って帰るか、金紙という神様への金銭の献上に使われるものを燃やす炉で、おみくじも一緒に燃やすことができる。

関帝廟のおみくじは、全部で六種類あり、大吉、上吉、上上、中吉、中平、下下とある。

私がおみくじを引いたときは中平が出てきて、財産や功名、縁談、旅行などがあまり良い結果ではなかったため、炉で燃やした記憶がある。この紙のおみくじには表面に日本語で、裏面には中国語で書かれていた。私は、これらのことから日本の神社との違いを多く感じた。まず、神社では神様の姿を直接目にする機会が少ない。それに対して、関帝廟では、天空に住む玉皇上帝以外の神様のご神体があるため、そこが新鮮な部分だと感じた。

また、礼拝の際に生年月日を伝えるところも道教のお寺である関帝廟ならではの考えた。神社では、自分の名前と住所を伝えることはあるが、生年月日を伝えるということはめったにない。そのため、道教では生年月日は重要なものなのだろうと考えた。しかし、生年月日はその人を特定する基本情報としてではなく、その人の運勢を占うための素材として使われてい

ると知り、関帝廟での礼拝とおみくじの関係性の強さを感じた。

一般的に神社では、願い事とおみくじの運勢にはあまり強い関係性はなく、おみくじはただの運勢占いという印象である。ここまでおみくじの立ち位置が違うことは実際に行って経験してみないと気づけない点だと思ふので、今回のコース演習で関帝廟に行けたのは良い機会だったと感じている。

(菱沼)

以上が校外学習に参加した学生による体験談である。そこから見えてくることは、関帝廟での参拝方法が私たちになじみの深い神社や寺院でのそれとは大きく異なっている点である。神に祈るという行為は共通するものの、自身の個人情報を神に具体的に示さねばならず、また願い事も極力具体的な内容として伝えなければならぬ。これは道教の持つ現世利益の性格に拠るものである。このようにギャップを知る機会は、私たちの感覚に刺激を与え、視野を広げるものでもある。その意味においてこの経験は学生にとって意義のあるものだと見えよう。

昨今、日本社会には国外から多様な文化的・社会的バックボーンを持った人々が訪れているし、今後もその傾向は続くと考えられる。それは留学生や観光客、あるいは移民と様々な形での来訪となるが、これらの異なった文化・言語をバックボーンとした人々と対峙しつつ、社会を維持するためにも、異文化の論理・価値観を把握し、より柔軟なものとの捉え方ができるようになることが求められる。さらには、これらの人々と円滑なコミュニケーションを成立させ、多文化共生社会を作り上げるための努力も必要とされるようになる。今回のような機会は学生にとってそうした意味で

も良い契機になったと考えられる。(中林)

参考文献・サイト

- ・野口鐵郎他編『道教辞典』平河出版社、1994年
- ・二階堂義弘『中国の信仰世界と道教』神・仏・仙人』吉川弘文館、2024年
- ・茶と猫と。「日本の神社とは違う関帝廟のおみくじ」
<https://ameblo.jp/chasaji-b/entry-1176005252.html>
 (2025年7月18日閲覧)
- ・ハマのくま横浜散歩「横浜関帝廟のご利益は、おみくじ・お守り・場所・歴史や見どころを知って訪れよう」
<https://hanakuma3.com/yokohama-kanteibyochinatown/>
 (2025年7月18日閲覧)
- ・横浜観光情報「横浜関帝廟」
<https://www.welcome.city.yokohama.jp/spot/detail.php?bid=807>
 (2025年6月18日閲覧)
- ・「横浜関帝廟」
<https://yokohama-kanteiyo.com/>
 (2025年6月24日閲覧)

夏ゼミナール
 食を通して異文化を読み解く

外国語学部 中国語学科3年

厚澤 悠子・安齋 結捺・池田 美嘉・小松 かおり

増田 帆香・三田 裕花・横山 莉央奈

今回のゼミ活動では、「本格中華を学ぼう」というコンセプトのもと、中華料理のちまき、麻辣拌(マールータン)、酒釀小丸子(白玉団子入りの甘酒)を作りました。

麻辣拌は、辛くてシビれる味が特徴で、中国で人気料理の一つです。最近日本でも話題の「麻辣湯(マールータン)」のスープなしバージョンです。野菜、お団子、肉、麺など、好きな具材を特製のタレに和えるのですが、タレを作っているときに広がる唐辛子の香ばしい香りに、みんなワクワクしながら作業を進めました。初めて食べた人は「辛いけど美味しい」とハマる人もいれば、「辛すぎてやっぱ無理!!」と本場の辛さに驚く人もいて、すごく盛り上がりました。



麻辣拌 (汁なしマールータン)



麻辣拌のタレ作り

ちまきは、旧暦の5月5日「端午節(端午の節句)」が近かったこともあり、チャレンジしてみました。「端午節」は、「春節」、「中秋節」と並ぶ中国三大伝統節句の一つです。ちまきは中国語で「粽子(zongzi)」と言い、北方の味付けが甘く、南方が塩味という違いがあるようです。

今回私たちが作ったのは北方のちまきで、もち米や具材(小豆、ピーナツやナツメなど)を笹の葉に入れて包み、一から手作りしました。人生初のちまき作りは笹の葉の隙間から具材が出ないように結ぶことに苦戦しました。みんなで試行錯誤しながら作って楽し

かったです。

出来上がったちまきに砂糖をつけて食べることに驚きましたが、ほんのり甘くて、おはぎのような味わいで、美味しかったです。これまで食べたことがあった、豚肉、たけのこ、椎茸などの具材が入ったおこわ風のちまきとの違いを実際に作りながら体験できて、とても良い経験になりました。



ちまきの出来上がり



ちまき作り奮闘中

酒釀小丸子は中国式甘酒に小さめの白玉団子、ナツメや枸杞(クコ)などを入れて煮込む中華式デザートになります。中国では家庭ではもちろん、結婚式や赤ちゃんの生後1か月を祝う「満月酒」など、大人数の宴会の最後に出されるデザートの一つでもあります。特に南方出身の人にとっては、小さい頃から親しんでいる味になります。今回のゼミ活動でも最後にこの酒釀小丸子を作りました。小丸子(白玉団子)も上新粉からみんなで一緒に作りました。それを中国式甘酒と一緒に水で煮て作ります。ほんのり甘く、少しお酒の風味がするのが特



酒釀小丸子

微です。最初は「これも甘酒？」と不思議そうな反応が多かったのですが、実際に飲んでみると、「美味しい！」という声がたくさん聞こえ、同じ甘酒でも日本のと全然違うことに皆驚きました。



個性豊かな手作り小丸子

さらに、留学生には和食の調理方法を試してもらいたいと思い、日本の代表的な食べ物のお寿司である

「手巻き寿司」と、家庭やお祭りで親しまれている「豚汁」を作りました。好きな具材を自分で選んで巻くスタイルだったので、みんな個性が出て楽しかったです。新鮮な刺身や卵焼き、きゅうりなど、彩り豊かで見ただけでも美味しそうでした。



豚汁

が、じっくり煮込むことで玉ねぎの甘みが引き出され、美味しく作るコツを実感できました。普段からバイトで料理をする機会が多くあるので、その経験が今回の活動にも活かされたのが嬉しかったです。また、留学生や



手巻き寿司

ゼミの中国にルーツも持つ学生にも和食の調理に参加してもらえて、日本の家庭料理を実際に食べてもらうことができ、とても嬉しかったです。

今回の活動を通して、日本と中国それぞれの料理をみんなで協力して作ることで、食文化の違いや共通点について深く学ぶことができました。企画から買い出し、調理、そして片付けまでを全員で行い、自然と会話も増え、ゼミの仲間、そして留学生との距離がぐっと近くなったように感じます。本当に貴重で楽しい時間でした。

FYS (日本文化学科)

横浜美術館・

リニールオープン記念展

「おかえり、ヨコハマ」展を見て

国際日本学部 日本文化学科1年

内田咲紀・錦織なぎさ・村田優月

1 五月二五日(日)、私たち日本文化学科・FYS(松本クラス)では、横浜美術館で開催されているリニールオープン記念展「おかえり、ヨコハマ」展、および、コレクション展を鑑賞しに行きました。

この展示は、横浜にまつわるものを多角的な視点で追うような、非常に興味深いものであった。美術館自体初めての経験だというメンバーもいたが、常設展示を含め、横浜美術館を楽しめたようだった。

中でも心に残った展示について、代表者三名がまとめる(1・3 錦織、2・5 内田、4 村田)。

2

「おかえり、ヨコハマ」展の中で私が目を惹かれたのは、「第2章 みなとを、ひらけ」である。このコーナーでは主に開国した当時の横浜の様子を描いた浮世絵、いわゆる横濱絵が展示されている。パンフレットの「みなとを、ひらけ」のコーナーの説明を彩る作品である昇斎一景の《汐留より蒸気車通行の図》(一八七二)では、いかにも洋風といった外観の駅舎と、当時は開通して間もなかったであろう蒸気機関車が描かれており、開国した当初、「外国風」のものがいかに珍しく思われていたのかがうかがえる。

展示作品の中で、同じく蒸気船を描いた歌川広重(三代)の「横浜海岸鉄道蒸気車図」では、蒸気機関車の奥に見える横浜の港と、その港に浮かぶ数々の船が横浜の開港を象徴しているようである。さらに、この浮世絵に描かれた蒸気機関車には赤色が使われている。開港以前は赤色の絵具の顔料には紅花という植物が使われており貴重なものでもあったが、開港して外国から比較的安価で手に入る、発色の良い赤色の絵具が流通したという事情を、蒸気機関車に使われた色からも垣間見ることができ、鑑賞することにおいて非常に楽しい作品となっている。

3

私は、「おかえり、ヨコハマ」展の、「第6章 あぶない、みなと」に心惹かれた。このセクションでは、戦後占領期の横浜の写真が多く展示されており、外国の兵士に囲まれる女性など、不穏な様子のもものも少なくなかったが、それだけではない。写真の中の銭湯帰りであろう女性たちや笑顔の子どもたちは、決して不幸には見えなかった。私は、彼ら彼女らの不安定な世の中でも日々を楽しむ力強さに魅力を感じた。

ところで、私は「おかえり、ヨコハマ」展の「ヨコハマ」が、なぜカタカナで表記されているのかについて、一つの仮説を立てた。「ヨコハマ」とは、ただ単純に横浜市を指しているのではなく、いつからどこからだから、多様な視点から見たこの場所が「ヨコハマ」であると考えた。

4

私が、今回鑑賞した作品の中で最も感動したのは、「新収蔵作品特別展示——浅井裕介の《八百万の森へ》」で展示されていた、浅井裕介の《八百万の森へ》(二〇二二)という作品である。この作品は、横浜信用金庫が創立100周年の記念事業として、二〇二三年に横浜市文化基金に寄附を行ったことをきっかけに制作され、横浜美術館に収蔵されたものだというのである。横浜市内各所の土を絵の具として使用し、九枚のパネルを組み合わせたこの作品は、高さ約三メートルもあり、圧倒的な迫力と存在感を放っていた。

土が使われているからなのか、《八百万の森へ》は強い生命力を感じる作品だった。見ているだけなのに、まるで自分が絵の中に入り込んでしまうような、このままこの空間から動けなくなってしまうのではないかなと思わせるほど、一目見た瞬間から作品に引き込まれた。

この作品は九枚のパネルで構成されているので、組み合わせのパターンが七種類も存在するそうだ。今回見たのは、その七パターンのうちの一つだけだが、他のパターンによってはまた別の見え方、感じ方になるのだろうか。どう組み合わせるかで絵が変化するという点が、刻一刻と変化する自然そのものを表しているようにも感じた。

今回の美術館の鑑賞では、多くの刺激を受けた。この経験を自分のこれからに活かしていきたい。

5

「おかえり、ヨコハマ」展は、私たちに馴染みのある土地である横浜の過去について、視覚的に知る経験を与えてくれた。

かつての横浜で培われた文化と人々の営みが、私たちの生きるここからの横浜をさらに魅力的な街へと育んでいくことを願いたい。



鳥川ゼミナール

軍艦島に見る

産業遺産と観光の未来

——長崎研修レポート——

国際日本学部 国際文化交流学科

観光文化コース 鳥川崇ゼミナール

私たち鳥川ゼミナールは、観光業界や公的機関において、地域の魅力を発信し、持続可能な観光を支える人材の育成を目指して日々活動を続けています。ゼミでは「旅行業および集客施設の企画と運営の実践的アプローチ」というテーマのもと、旅行会社やディベロッ

パーと連携したプロジェクト型の学習を重視し、教室を飛び出した実地体験を通じて、実務感覚を養っています。

2025年度の取り組みの一つとして、箱根・強羅にある函嶺白百合学園高校2年生の修学旅行における長崎での自由行動プログラムの企画・提案を行っています。この実習では、受け手である高校生にとって「学びのある体験」を提供することが求められるため、私たち自身が現地を訪れ、体験に基づいた企画を立案する必要が有ると考えました。そこで、ゼミ生有志で2泊3日の長崎研修旅行を実施することとなり、その目玉として選んだのが、近年国内外の注目を集めている世界遺産「軍艦島(端島)」の訪問です。

◆産業遺産の象徴、軍艦島へ

長崎港から南西約19kmの海上に浮かぶ端島、通称「軍艦島」。かつて海底炭鉱で栄え、最盛期には東京以上の人口密度を誇ったこの島は、昭和49年(1974年)に閉山し、無人島となりました。現在では、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産のひとつとして、製鉄・製鋼・造船・石炭産業の近代化を物語る貴重な文化遺産として保存されています。

軍艦島という名前は、島の外観が戦艦「土佐」に似ていたことから名付けられたものです。海上から見るとその姿は、まさに鉄とコンクリートの要塞のようで、私たちのような観光を学ぶ学生にとっても圧倒的な存在感を放っていました。

訪問にあたっては、事前に世界遺産の意義や日本の産業近代化の歴史についての学習を行い、ただの「物見遊山」ではなく「学びの旅」としての準備を整えました。当日は、株式会社シーマン商會様が運営するク

ルーズツアーに参加。午前10時30分、長崎港を出発し、約40〜50分の船旅が始まりました。

◆上陸のハードルと学び

軍艦島への上陸は、天候や海象条件に大きく左右されます。具体的には、風速が5mを超える場合、波の高さが0・5mを超える場合、視程が500m未満の場合、あるいは船長が安全に下船できないと判断した場合は上陸が許可されません。実際、出航しても島に近づいてから上陸中止となることもあり、年間で上陸できる日はおよそ100日程度にとどまります。

私たちの訪問日は、幸運にも条件を満たし、上陸の許可が下りました。ただし、上陸後にもいくつかの制約が設けられています。例えば、安全確保のために建造物からは常に約80m以上の距離を保って見学する必要があります。これは、万が一の事故やけがに備えて救急対応が難しい環境であることから、見学者の安全を最優先とした措置です。

島内はすべてがコンクリートに覆われており、影となる場所がほとんどないため、日差しの強い夏季は特に厳しい見学環境となります。それでも、倒壊の進む建物の姿や、そこに残された生活の痕跡を目の当たりにすることで、教科書では得られない深い実感と学びを得ることができました。

◆観光に求められる「心配り」

クルーズ中は、専属ガイドの方が軍艦島の歴史、かつての住民の暮らし、島の役割などを写真や実例を交えて丁寧に説明してください、移動中も学びの時間が続きました。また、「明治日本の産業革命遺産」に含

まれる三菱造船所をはじめとした周辺施設についても解説があり、産業遺産としてのつながりを俯瞰することができた点は非常に有意義でした。

さらに印象的だったのは、ツアー運営者のサービスのきめ細やかさです。島内で日傘の使用ができない代替として麦わら帽子を貸し出すほか、見学後には冷たいおしほりを全員に配布するなど、乗船客のニーズを先回りした心配りが随所に見られました。特に暑さに疲れた体に冷えたおしほりはありがたく、思わず「また利用したい」と感じさせるおもてなしの力を目の当たりにしました。

◆軍艦島が教えてくれたこと

私たちゼミ生のほとんどが、今回が初めての軍艦島訪問でした。実際に訪れてみて感じる空気や景色、そして静けさの中にある廃墟の存在感。それは、文字や映像だけでは到底伝わらない「現地のリアル」でした。

建物の崩壊は今なお進行しており、見学できる範囲や状態は時間とともに変化しています。今日見た風景は、明日にはもう見られないかもしれない。軍艦島は、まさに「時間とともに消えゆく記憶」を私たちに見せてくれる場でもあります。その儚さが、よりいっそう歴史の重みと尊さを感じさせてくれました。

また、今回の体験を通じて、観光地における安全基準の重要性、文化財を守るためのルールの意味、そしてそれらを理解しようとする訪問者の意識の必要性を強く感じました。単に「見る」だけでなく、「守る」「伝える」立場になったとき、観光の意義は大きく変わります。今後、観光を企画する立場として、自分自身がどのような責任を持つべきか、改めて考えるきっかけとなりました。

となりました。

◆最後に

今回の軍艦島訪問は、私たちにとって単なる見学ではなく、歴史・観光・教育・サービスといった多面的な学びを含んだ実践の場でした。そして、島内を歩いたあの時間が、将来、観光を担う私たちの「原点」となっていくような、そんな確かな感触を得ることができました。

今後も島川ゼミナールでは、現場での体験を大切にしながら、「観光」を学問としてだけでなく、人々の心を動かす文化として探究していきます。



最も軍艦島らしく見える場所からの軍艦島（端島）と島川ゼミメンバーと島川先生・島田先生

ウエルカーゼミナール
学外実習

（秋葉原・米沢嘉博記念図書館）

国際日本学部 国際文化交流学科3年

糸谷 蓮華・多宮 壮太郎・柳井 歩乃佳

◆アキバについて

私は、秋葉原といえば「アニメ文化の街」というイメージを持っていましたが、実習で先生の話聞き、

もともとはアニメと関係のない場所だったということを知り驚きました。

特に印象に残っているのは、1990年代ごろから空き店舗が増えて家賃が安くなり、それをきっかけにアニメショップや同人誌を扱うお店が少しずつ増えていったという話です。たまたま空き地だったからこそ、新しい文化が入りやすかったという流れにとっても納得しました。

また、秋葉原は江戸時代には火除け地として整備され、戦後には電気街として発展し、その後パソコンの街へと変化していったそうです。そういった歴史の流れの中で、ゲームやアニメといったサブカルチャーが自然と根づいていったのだと感じました。

今では「オタクの聖地」と呼ばれる秋葉原ですが、それは偶然ではなく、長い歴史と時代の変化が積み重なって生まれたものだと知り、秋葉原という街が前よりももっと興味深く感じられるようになりました。

(糸倉)



秋葉原駅

◆メイドカフェについて

秋葉原には何度か訪れたことがあったのですがメイドカフェは初めてでした。秋葉原には電子機器やアニメのイメージがあったので、「萌え」という文化があるのを再認識しました。初めてなので緊張していましたが、自分の想像していたようなお客さん全員がス

テージの前で謎の棒を振り回して踊っていることや、コアなファンが多いのではないかと

いうことは全くなくて安心できました。

そして、ステージ上で踊る音楽も一曲目は「かわいいだけじゃだめですか？」だったのですごく親しみやすくなっていました。二曲目はめいどりーみんの音楽で、頭に残るような曲でした。特定のメイドさんに会いに行くだけではなく、友達と楽しむために来たり、メイドさんがステージでダンスを踊ってくれた時にみんなで手拍子をするなど、お客さんを含めて楽しめるようになっていっているんだなと思いました。

メイドカフェは初めて行くとなると緊張すると思いますが、エレベーターでボタンを押しちゃえば入るしかなないのでおすすめです笑。

そしてついでに秋葉原神社にも寄り寄りましたが、まずすごく小さかったことに驚きました。「これが神社なんだ」と思いましたが、調べてみたら神社は別にあります。

(多筈)

◆明治大学

米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館について

明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館は、「コミックマーケット」の創立者の一人であり、マンガ評論家として知られる米沢嘉博氏が収集した



メイドカフェ

1950年〜2000年代の資料14万冊を所蔵しています。日本最大級のマンガ専門図書館であり、マンガ単行本、アニメ誌、マンガ雑誌、同人誌、情報誌など、そのジャンルは多岐にわたります。

1階の展示室では、マンガや雑誌の付録、グッズなどが展示されており、入場無料で自由に楽しむことができます。2階の閲覧室では、会員登録をすることで資料を閲覧できます。マンガや雑誌はどれも第1号から揃っており、作品やジャンルの変遷をたどることができます。

実際に訪れてみて、まず所蔵されている資料の多さに圧倒されました。また、自分の研究に関わるテーマに関連した、これまで見たことのない資料も見つかり、新たな発見につながりました。膨大な資料の中から、自分の興味や関心に合うものを見つけられるのも大きな魅力です。さらに、昔のマンガや雑誌だけでなく、最新のものや海外作品も揃っているため、幅広い世代や関心を持つ人々が楽しめる図書館だと感じました。これほど多様で貴重な資料に直接触れられる場所はほとんどなく、マンガ文化を深く理解するうえで非常に貴重な場だと実感しました。

(柳井)



明治大学
米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館

西原さつきさん講演会

「自分らしく生きていく」@多文化共生論



教壇に立つ西原さつきさん

多文化共生論（国際日本学部・学部教養科目）は、民族や人種差別といった問題だけでなく、ジェンダーや障害、ホスピタリティなどをとりあげる回もあり、多様な観点から人々が共に生きていくことについて考える授業です。ジェンダーに関する回では、同性婚や女性の社会参画について考えましたが、それに加えて、トランスジェンダーに注目しました。

LGBTとして、セクシャル・マイノリティとして同性愛等と一つにまとめられがちなトランスジェンダーですが、LGB（レズビアン・ゲイ・バイセク

シャル）までが性的指向を指すのに対して、T（トランスジェンダー）は性自認であり、別個に考える部分が多いことを強調して、生活するうえでさまざまぶつかる障壁（バリアー）を紹介してきました。

しかし、やはりこうしたことでは当事者に話してもらいたい、そして当事者といっても、セクシャリティについてだけでなく、現在関心があることや大事にしていることなど、多様な姿を見てもらいたい、そのような想いから、歌手、ボーカリスト、ボイストレーナー、女優、モデル、タレント、ナレーターなど多彩

国際日本学部 国際文化交流学科 熊谷 謙介

な活動を行っている西原さつきさんを、多文化共生論の先生としてお招きしました。西原さん自身も、「色々な世界を知ってもらおう」という目標を講演の冒頭で示し、「正解があるものではない」ことを強調してくれたので、和やかな雰囲気での講演はスタートしました。まじめな話も大切だけど話題に挙げるにはハードルが高い、「もつと身近に、もつとポップに！」という考え方を示してくれて、大学教員としてはツボを突かれました。

西原さつきさんには2024年度、多文化共生ゼミでゲストとして来てもらったのですが、そのときは25人くらいの学生を相手にしたやりとりでした。一方、今回は履修者数としては250人を超える講義なので、事前に西原さんへの質問を募集し、そのなかからピックアップして答える、Q&A方式を採用しました。しかし担当教員である私の予想を超えて、非常に多くの質問が寄せられ、まず学生たちの関心の高さに驚きました。

そして何より驚いたのが、西原さつきさんがそのほとんどをとりまとめで、丁寧に答えていったことでした。準備も長くかかったでしょうし、答えるにくいようなプライベートな質問、またトイレ使用の問題などSNSなどを中心にしたいわゆる「炎上」案件についても、自分のスタンスを伝えつつ、バランスのとれた回答してくれたことに、感銘を受けました。

また、社会制度や政治に関する質問、たとえば同性婚の法制化の動きについては、賛成であることを前提にしつつ、どうですかと訊かれると「隣の学校の話のように聞けるところもある」と答えていました。トランスジェンダーと同性愛等の性的指向の問題は、似ているように見えて異なる面が大きいということを伝える、きわめて分かりやすい表現であるように思います。どうしてもジェンダー論というアプローチは、各人の生き方を社会問題に還元して考えてしまいがちですが、まずは一人ひとりを見ていくこと、そして対話していくことが大事であることを痛感しました。

さらに、学生どうしのグループワークの時間も多用していただき、最初は「ニッチだけど好きなものを共有してみよう！」というアイスブレイクから始まり、「言われてモヤモヤした一言」「もし友だちに相談されたらどうする？」など、話しやすいトピックを挙げながら、学生たちががいがいに交流できる場所を作っていました。とくに最後の問いについては、西原さんとしての「模範解答」があり、ここでは紹介しませんが、学生も私も大きく納得するものでした。

講演終了後、とくに今回は授業内の講演なので、それで解散となるのが通例ですが、その後でみなとみらいキャンパス1Fのカフェで親睦会が行われました。担当教員である私は出席できなかったのですが、10人を超える学生が集まったというのも驚きで、おしゃべりに花を咲かせたと聞きました。講演だけでなく、交流の場を学生たちが主体的に作ってくれたのは、教員冥利に尽きることでした。

最後に、今回の講演を聞いた感想を一部取り上げて終わりにしたいと思います。西原さつきさんの講演

が、多くの学生に世界が色とりどりであることを伝え、一人ひとりの生き方を肯定して、勇気を与えるものであったらと、願っています。

* * *

・トランスジェンダーに関する知識だけでなく、実際に経験されたエピソードや想いを聞かせていただくことで、より深く「ありのままの自分らしく生きること」の大切さを感じました。ひとつひとつの言葉に優しさと力強さがあって、とても心に響きました。

・私たちは、相手の性別の話題になると、ついその人と距離を置いてしまったり、シビアな問題と認識して、触れてはいけないことのように感じてしまいましたが、実際はそのようなことはないのだと思いました。たとえ心と見た目の性別が違っていても、同じ心を持った人間であることには変わりないですし、触れてはいけないことでもないと思います。そういった認識を変えていくためにも、今回のように、トランスジェンダーの方から直接お話を聞いたり、交流したりする機会というのは今後の社会においてとても重要だと思うので、これからも広い面でそういうことを行い、多文化共生社会に向けて、だれもが生きやすい社会を目指したいと思います。

・自身の体験をもとに語られた言葉の一つひとつが、LGBTQ当事者としてのリアルな声であり、深い共感と学びをもたらしてくれました。外からは何も問題がないように見えても、心の中では自分の性別

やアイデンティティに葛藤し、社会からの理解や承認を求めている人がたくさんいるという現実にも、改めて気づかされました。LGBTQという言葉を知くと、どこか自分とは遠いもののように感じていた部分もありましたが、西原さんのお話を聞いて、「違いがあること」自体が悪いのではなく、「違いを知ろうとしないこと」が問題なのだ気づきました。

・西原さんが自分の前髪を固める時が好きと仰っていて、その考えにとっても共感しました。私も前髪が上手いだった時やアイラインが綺麗に引けた時にテンションが上がるので、その感覚が分かり合えるのが嬉しかったです。

・僕は力がないし男らしいかと言われるたら全くなくて、「男なんだからこれくらいしなよ！」とか「もちなよ！」と言われたことがあって、それはなんだか違和感しなくてずっと色んな人に言ってきましたが理解されないこともありました。それぞれ思うことは違うし、モヤモヤする観点も違うので、尊重するべきだと思いました。

・これまで私は、西原さんのようにジェンダーに関する活動をしている方々は、ある意味自分の中で区切りがついていて、ブレない自分の芯を持っていたり、ジェンダーという個性に関しての悩みも自分の中で解決したりしているものだと思うっていました。しかし、実際にお話を聞いてみると自分が何かわからなくなる時があったり、お手洗いや気を遣って外ではあまり行かないようにしていたりと、そのような活動を前向きに見えるような人でもやはり悩むも

のなのだ初めて知りました。

• youtubeやSNSも拝見して、さつきさんが自分らしく楽しんで活動している姿を見て私も自分の好きなように自分らしく生きようと、勇気と希望をもらいました。さつきさんの授業は気さくに明るく話してくださりリラックスして聞くことが出来て、私の中で大学で1番楽しい授業であったと感じます。

• トーク会に参加した際に、人数が多く、話す人が偏ってしまつた時に西原さんが話を振ってくくださったおかげで自分の意見を言うことが出来ました。今まであまり真剣に自分の家族のことについて話を聞いてもらつたことがなく、いつも笑い話として話していたので、西原さんが目を見て真摯に話を聞いてくださつて、とても心が軽くなりました。ありがとうございます！

• 自分らしく生きることがまだ難しいとされている社会の中で、勇気をもって声を上げ、行動し続ける姿には大きな力を感じます。「性の多様性」という言葉がまだ浸透していない時期から、自らの経験をもとに、人と人との違いに橋をかけようとする活動は、まさに希望そのものだと思います。これからの時代を生きる私たちにとって、西原さんのように「自分であることをあきらめない姿勢」は、強く、そして優しい光です。

* * *

今回の記事の一部は、神奈川大学国際日本学部HPのBlogに掲載されたものです。転載を認めていただいた国際日本学部にお礼申し上げます。

https://note.com/kanagawa_ccj/n/ndf203970ef00

また、学部HPの方では、西原さつきさんの講演会だけでなく、神奈川大学訪問の様子がよくわかる動画も見ることができるので、こちらもごらんください。

<https://www.youtube.com/watch?v=SOIzOP1nhA>





- ▶ 日時：2025年5月29日（木）13:30～15:10
- ▶ 会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス4006教室
- ▶ 主催：神奈川大学人文学会
- ▶ 国際日本学部・多文化共生論の授業内の実施ですが、一般にも公開します。参加ご希望の方は下記リンクまたはQRコードで5月27日（火）までご連絡ください。<https://forms.office.com/r/4cAd8b6U0y>
- ▶ 問い合わせ先：熊谷謙介（神奈川大学）f110822gq@kanagawa-u.ac.jp

西原さつきさん

- ▶ 性移行した経験を次世代に伝えている。
- ▶ トランスジェンダーの支援を進め、レッスンスクール「乙女塾」と、音楽制作の場「スタジオさつきほん」を設立。近年は自身で作詞と作曲を手がけたオリジナル楽曲を数曲発表中。その他にも、テレビドラマや映画の監修、化粧品や学生服メーカーと協業で商品開発などへの取り組みや、学校現場や企業での講演など多岐に渡って活動。
- ▶ シングル：「30年後のラブソング」「アイスクリームハニー」（映画）、「あいのまほう」（作詞作曲）
- ▶ 主な作品：NHKドラマ「女子的生活」・映画「ミッドナイトスワン」・テレビ朝日系列「六本木クラス」（出演・脚本・監修）

西原さつきさん講演会「自分らしく生きていく」



プラスアイ編集スタッフ募集中！

人文学会学生部会発行の「PLUSi」の企画・編集に携わりませんか？
月に2回ミーティングを開催しています（主にみなとみらいキャンパス）。
詳しくは <http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/intro/index.html> まで
また秋には「学生文化奨励賞」も開催しますので、奮ってご応募ください。



PLUSi Alius VOL.4

編集・発行
制作協力

2025年9月30日発行

神奈川大学 人文学会学生部会 PLUSi 編集部
富士オフセット株式会社